

思想の道具としての日本語の問題点

——近代日本語が抱える特殊性について——

保坂俊司

東京例会において、一昨年よりはじまった「新たな比較思想」への挑戦の試みは、回を重ねるごとに、その成果として、さまざまな課題が見えてきた。今後さらなる努力を通じて、再び比較思想の学問としての意義や有効性について、検討をしてゆきたい。

さて、これは比較思想学会のみの現象とは言えないが、人文系の学会は総じて会員数の減少に直面している。さらに言えば、思想系の学会は総じて会員数の減少に加え、学問的な衰退とも言える現象に直面しているのではないだろうか。これは、若者人口の減少という絶対的な主原因であることであろうが、しかし、それだけであろうか？

例えば、日本社会全体が、哲学や思想を求める情熱というか、機運が減退しているように思われるのは筆者だけであろうか。同時に、研究者の社会的貢献度も小さくなっているように思え

てならない。例えば、この比較思想学会が創設された当時の日本は、思想や哲学に対する社会的なニーズも高く、また研究者も意気軒高であった。つまり、思想や哲学に、社会的にその発言、或は貢献が期待されたし、また学者もそれに応えていたように思われる。

しかし現代は如何であろうか？ 思想や哲学への期待は、社会全体に共有されているであろうか？ 学者は、社会の要請に応えているであろうか？ また期待されているであろうか？

グローバル化が急激に進み、人、物、金、情報が瞬時に世界を駆け巡る時代となって思想や哲学本来の役目である自己を見つめたり、他者への理解に思いを巡らすことは、不要となったのであろうか？ 或は社会の木鐸としての役割を期待されなくなったのであろうか？ 放棄したのであろうか？ いずれにしても、思想家自身の自己分析は必要であろう。少なくとも、こ

のような現象への自己分析は不可欠であるように思われる。

そこで、重要なのが私たちの依って立つ日本思想への自己分析であろう。その時に、日本人にありがちな両極端、つまり自虐的立場や自己陶醉に陥らず、公正で中立、かつ生産的な分析や議論が不可欠となる。当たり前のことであるが、この中立性は、やはり確かな方法論によって担保されるはずである。その時に、比較思想の培ってきた基本スタンス、方法論は極めて有効である、ということとは恐らく議論の余地はないであろう。と考えるならば、今日のような急性急なグローバル時代において、日本人のアイデンティティ喪失の危機にある時こそ、比較思想の活躍の場がある、ということにならないだろうか？

しかし、実際には、前述のとおり現象である。この原因は多様であろうが、その大きな原因の一つに、思想を練り上げ、表現するために不可欠な言葉の問題があるのではないか、というのが最近の筆者の考えである。

具体的に論じるには紙幅の制限があるので、象徴的な表現にならざるを得ないが、例えば「宗教」という言葉の検討を通じて、この点に少し触れてみよう。つまり、中村元博士の研究によれば、「宗教」という言葉は、もともと仏教用語であり、しかもサンسكريット語の翻訳語として生まれた。そして長年仏教用語として用いられてゆく過程で、独自の仏教用語として変貌した。その仏教の専門用語としての宗教という言葉が、明治初頭に英語の religion の訳語として用いられたことで、同じ言

葉に二つの異なる起源の意味が盛り込まれることとなった。しかも、「宗教は女子、小人の依るもの」というような明治の時代の宗教政策がこれに加わる。そして、そこからさらに宗教は危険なものなる偏見も生まれ、結果として、相反するような意味が重層的に形成され、しかもそれぞれが多様な意味を、恣意的に用いるために、日本人の宗教観は、混乱しっぱなしである。これでは、厳密に宗教という言葉を用いた議論は深まらないであろう。実はこの傾向は、他の事例にも当てはまる。筆者は最近「平和」という言葉に、この方法を当てはめて検討したが、事情は同様で、しかも平和はより政治的な、つまり実践的な内容を含むゆえに、その弊害は大きい。

このような日本近代の言葉の抱える問題点について考えていた矢先、本比較思想学会の大先輩である小坂国継先生の『近代日本哲学のなかの西田哲学』（ミネルヴァ書房）をお送りいただいた。そして、その序章において、筆者の考えることが、さらに具体的、かつ深く検討されているのを知った。ぜひこの際ご一読をお勧めしたい。

いずれにしても、日本思想の抱える最大の課題である言葉の不安定さに関心を持つことは、思想形成や伝達の道具を正確に使いこなす第一歩であろう。これなくして、深い思想検討はできないのではないかと考える次第である。

（ほさか・しゅんじ、比較思想、中央大学総合政策学部教授）